



医学部だより

第13号

2006.12.1



医学部長就任の挨拶

医学部長 松本 俊夫

この度、曾根三郎前医学部長の後任として、平成18年11月16日より第23代医学部長を担当させて頂くこととなりました。誠に光栄に存じますと共に、極めて厳しい現在の医学部を取り巻く環境の中で責務の重大さに身の引き締まる思いであります。

財政面では国立大学法人には画一的・継続的に独立採算への努力が科せられ、文部科学省から交付される運営費交付金に効率化係数が毎年負荷されています。そして運営費交付金の学内での配分は大学本部の裁量に委ねられ、各部局への配分額がこの効率化係数による減額率を上回る場合も今後少なからず生じる可能性が考えられます。この中において他部局との協調をはかりつつ医学部の発展を維持するためには、限られた資金の効率良い運用と最適の資金投入をはかる必要があるのみならず、運営費交付金に依存する体質から脱却し、あらゆる面から資金導入を見直し、外部資金を含めた運営資金の確保を図る必要があると考えられます。更に人事面では、元来公務員一律削減による国立大学の教育・研究環境の悪化への影響を緩和する為との理解の下で進められてきた筈の独立法人化にも拘わらず、各国立大学法人の定員一律削減計画の遵守が求められています。この中において、寄付講座の誘致を含めたあらゆる形での教育・研究環境の確保により医学部の発展を図る必要があるものと考えられます。新たに、曾根前医学部長の強力なイニシアチブで進められている腫瘍内科学寄付講座の設立は、こういう動きの中での重要な一つの方向性を示すものと思います。

教育面では、平成16年度より開始された卒業初期臨床研修の必修化と全国マッチングシステムの導入により、大都市に所在する大学や旧帝大等のごく一部の大学を除き、全国の大学における卒業教育システムが壊滅的とも言える打撃を被っています。これは医師の卒業臨床教育のマニュアル化を助長し、元来あらゆる医師に必要とされる研究マインド育成の軽視にもつながりかねず、わが国の医学教育の根幹を歪めかねない由々しき事態であると深い危惧を抱えています。

医師とは、高度な生命科学に立脚した医学を理解し、これを実践するための技術の修得を必要とされるプロフェッションです。またその実践の為に栄養学、看護学、検査診断学などの多様な領域との密接な連携が必要とされます。徳島大学医学部

は、これら医療の実践に必要なとされる幅広い学問領域を総合的に備えた極めてユニークな医学部です。この特徴を活かした総合医学教育を通じて、医療従事者としての使命感を培い、地域医療への貢献を果たすと共に、自分の頭で考え新たな知識を創造できる人材の育成を目標としたいと思います。また人類の最新情報を共有でき、自ら世界に情報を発信できる国際性豊かな人材の育成をめざしたいと思います。今後も、卒前・卒後を通じた大学における一貫した臨床・基礎医学教育の重要性を粘り強く訴えつつ従来の問題点を克服し教育環境の整備を進めることにより、本来あるべき卒前・卒後教育システムの確立に向けた努力を継続する必要があると思います。全国に類を見ない隣接する徳島県立中央病院と徳島大学病院との連携は、徳島大学における今後の卒前・卒後教育の方向性を確立していく上でも重要な基盤となるものと期待しています。

研究面では、曾根前医学部長のご尽力により医学、歯学、薬学、栄養学を統合した大学院部局化が実現し、平成16年度よりヘルスバイオサイエンス研究部として生命科学、先端医学研究、医療開発の一大拠点としての歩みを進めています。また平成18年度より大学院保健科学教育部も設立されました。この間、平成15年度からは医学科および栄養学科を中心とした二つの21世紀COE拠点形成プログラムが採択されました。しかし、平成20年度からは拠点数を約半数に絞り込んだ新たなCOEの拠点形成プログラムが計画されており、その採択に向けて蔵本地区を挙げての新たな計画立案が必要となっています。研究大学としての方向性を堅持すべく、このグローバルCOE拠点への採択に向けて蔵本地区におけるあらゆる形での連携を含めた努力を払う必要があると思います。

これらの教育・研究活動を推進する上で必要とされる施設基盤の充実も極めて重要な課題です。限られた予算の中で老朽化した基礎および臨床研究棟の改修計画も滞りなく推進し、今後とも徳島大学病院の新病棟建設計画と連動した施設拡充・改修計画の強力な推進を図る必要があります。最後になりましたが、これら山積する課題に対処し、幾多の障害を乗り越えつつ徳島大学医学部の発展を図るためには、医学部職員および学生の皆様のご協力が欠かせません。今後とも力強いご支援とご協力を心よりお願い申し上げます。就任のご挨拶とさせていただきます。

特集 「医学部とモンゴル健康科学大学の学術交流－2006年度夏期モンゴル交流プログラム報告－」

モンゴル健康科学大学との交流事始め

前医学部長 曾根 三郎

本学医学部は諸外国の大学医学部との間で教員並びに学生の交流を深めており、教育・研究面で数多くの成果をあげている。通常、外国大学との交流のきっかけは、そもそも個人のお付き合いから発展することが多い。モンゴル健康科学大学(HSUM)との交流きっかけは、分子制御内科学分野の谷憲治助教授が米国NIH留学時にモンゴル出身のBiragyn博士と柔道や共同研究を通して芽生えた友情がきっかけで、彼の妹Yanjimaa医師を2000年に受け入れ、博士号取得のお世話をした。Yanjimaa医師が帰国後、2004年夏、私と谷助教授がHSUMを訪問した際、Lkhagvasuren学長、日本通のAltaisaisaikhan医学部長から大歓迎を受けた。学長からは、1990年にソビエトがロシアとなり、政治・経済の体制改革によりモンゴルは独立独歩の道を歩む事となったため、HSUMは欧米や日本、韓国に交流の輪を大きく広げている。事実、現在の医学部長は島根医大、歯学部長は東京医科歯科大のそれぞれの大学院で博士号を取得している。また、ロシア式医学教育から脱皮するために大掛かりな教育改革を進めている事等の説明を受けた。今後とも、HSUMの卒業生に日本の先端医学を勉強させたいとの要望があった。学長からの招請を受けて、翌年の2005年の夏に本学医学部から4名の教授(曾根、玉置、安友、丹黒)が表敬訪問し、第一回HSUMと当医学部との合同シンポジウムを開催し、HSUM大学と徳島大学医学部との交流協定が村澤国際担当補佐のご尽力にて締結された。以後、徳島大学への留学候補者を学長自ら選考

し、やる気満々の留学生が推薦され、この2年間で10名を受け入れている。多くは大学院に進み研究生活を楽しんでいる。2006年度は、島田光生教授を団長に苛原教授、金山教授、谷助教授と、情熱のある医学生達も加わり、2大学間の交流が活発にかつ盛大に行われた。参加医学生も帰国後の報告会では、モンゴルでの交流に感激し目の色が変わっていたのが印象的であった。大学間交流を発展させるには、国を超えての人との出会いを大切に、個人レベルの努力と情熱が必須と思われる。今後とも、教員、学生が諸外国との学術交流を通して国際貢献に繋がることを祈念して止まない。



第一回モンゴル健康科学大学との医学部生交流

2006年夏期セミナー 団長(臓器病態外科学分野) 島田光生

第一回モンゴル健康科学大学との医学部生交流は、1. 将来につながる医学生交流プログラムの基盤を作ること、2. 医学部・医学生のGlobalizationの一助とすること、そして付加的に徳島大学医学部、ヘルスバイオサイエンス研究部とモンゴル健康科学大学との共同研究、学術交流の発展に寄与するためのactionの一つとなることを目的として行われました。

このセミナーには、6人の医学生を選抜し、彼らには、各々、徳島大学のこと、徳島のこと、医学教育システムのことなどについてプレゼンテーション、帰学後のレポート提出、また、次回モンゴル健康科学大学の医学生を受け入れる際のホスト役になるよう指示をしました。彼らは各々のプレゼンテーション、モンゴル健康科学大学の医学生との心から交流、モンゴルの満喫が120%でき、今後の医学生交流プログラムの基盤を作ることが出来たのではないかと感じています。

ホスト役であるモンゴル健康科学大学では今回の交流プログラムのために医学生の中から“Student of the year”を受賞したあるいはノミネートされた学生を厳選してくれ、本学の医学生達はその英語力の高さ、プレゼンテーション能力の高さ、コミュニケーション能力の高さなど、社会インフラがdeveloping countryであるモンゴルの中で、自分たちよりも優れた能力の人材がいることをあらためて知る良い機会を得ることが出来たと

思います。彼らは“国際感覚を身につけて、世界に羽ばたける人材育成の重要性”を脳裏に刻むことが出来たのではないかと感じています。

医学部生の交流に加え、今回、消化器外科領域の癌研究の共同研究、泌尿器科の診断・治療、産婦人科領域の診断・治療、リウマチを中心とする膠原病の診断・治療のための共同研究、人事交流を含む交流計画の基盤作成が達成できました。さらに歯学部の西野名誉教授が今年からモンゴル健康科学大学に2年間滞在され、小児歯科を中心としたデンタルヘルスにおけるモ



ンゴルでの発展に尽力されており、徳島大学とモンゴル健康科学大学との学術交流は益々発展するものと思われます。

次回からのプログラムが brush-up され、また本学医学生達の意識改革が進むことによって、この交流プログラムは徳島大学

医学部の発展とモンゴル健康科学大学の医学部の発展に大きく寄与するものと思います。

最後に、学生ならびに我々にこのような素晴らしいチャンスをくださった曾根前医学部長に、団員を代表して深謝致します。

モンゴル健康科学大学との医学研究と診療に関する交流

私は、2004年に曾根前医学部長とともにモンゴル健康科学大学を訪問した経験を生かし、今回の訪問では副団長として両大学間の学術交流が少しでもスムーズに行われるよう努めさせていただきました。訪問中には「Joint Symposium」など多くの学術交流の場が設けられました。7月24日には「2nd Joint Symposium "Actual Problems of Clinical Practices"」と題したシンポジウムが半日をかけて行われました。本学からは島田教授、苛原教授、金山教授、そして私がそれぞれの専門領域における最新医療についての発表を行いました。モンゴル健康科学大学からもモンゴル医療の現状に関する4題の発表がなされました。Lkhagvasuren 学長も同席され、各発表に対しては Altaisaikhan 医学部長の座長のもと、活発な討論が行われました。厚生省にも訪問し、Batsereedene 医師と両国の医療や保険制度の現状についての意見交換がなされました。25日は、各診療科別に分かれ、モンゴル健康科学大学の関連病院において、診療の現場を見学しながらこの国の抱える医療問題や今後の課題について議論を交わしました。私は、以前本学で研究指導した Dr.Yanjmaa の勤める Shastin 病院を訪問し、若い医師や研究生に対して新しいリウマチ診療に関する講演を行うとともに、難治性リウマチ患者さんのベッドサイドに出向き、担当医師に対して診察法や治療

分子制御内科学分野 谷 憲 治

戦略の立て方について直接の指導を行いました。その後も、学長や学部長とはもちろん、モンゴルの若手医師たちとともに時間を共有する多くの機会をもつことができました。今回の訪問によって、モンゴルの医療の現状を知るとともに彼らのモンゴルの医療レベルの向上に向けての大きな熱意を感じる事ができたことは我々にとって大きな収穫となりました。



2006 年度夏期モンゴル交流プログラム

～コーディネーターとして参加して～

医学部長補佐（国際交流担当）村 澤 普 恵



今年7月22日から28日の日程で、本学医学部とモンゴル健康科学大学(以下HSUM)との夏期交流プログラムがモンゴルで開催され、私はコーディネーター

として、2度目となるモンゴルの地を踏みました。ウランバートル市内は、ビルなどの建設ラッシュで昨年よりさらに活気に満ちており、大きく発展を遂げようとしている様子が伺えました。

さて、このたびの交流の目的のひとつは、両校の学生同士が相互理解を深め、本学医学部とHSUMの将来を見据えた更なる交流の礎を築くことでした。そこで、学長表敬、学長主催の夕食会、そしてキャンプ場での2泊3日を除いては、先生方と学生の皆さんの活動が別行動となるようにプログラムを作成し、両校の学生が少しでも多くの時間を共に過ごせるようにしました。学生の皆さんは、学生主催のシンポジウムや文化交流、そして寮での両校学生共同の自炊生活等を通して、その目的を立派に果たし、将来に向けての大きな礎を築かれたと思います。

一方、先生方は、学術シンポジウムで、それぞれの専門分野での最先端の医療についてプレゼンテーションをされ、また、

連日のように、HSUMの多くのファカルティと今後の共同研究や相互交流のあり方についてのミーティングを持たれました。

様々なプログラムを通して、HSUMのファカルティや学生の皆さんと交流を深めることができましたのは、私にとりまして一生の思い出となる貴重な経験でした。このような交流プログラムにコーディネーターとして参加させていただいたことを心より感謝しています。

最後になりましたが、曾根前医学部長にはお忙しい中プログラム作成のご指導、ご助言を頂き、また、学務課、第一総務係の皆様、そして関係者の方々には、交流の準備等で大変お世話になりました。ありがとうございました。



モンゴル健康科学大学でのサマーセミナーについて

第一総務係 滝川 泰弘

徳島大学医学部とモンゴル健康科学大学は、昨年6月6日に、(1)共同研究及びシンポジウムの実施、(2)教員及び学生の交流、(3)講義及びセミナーの実施、(4)研究データ、資料、研究材料及び学術情報の交換等について学術交流協定を締結しました。締結後は、モンゴルでの共同シンポジウムの開催や、本学でのモンゴル健康科学大学長、副学長及び医学部長による講演会等の実施、モンゴル健康科学大学から若手研究者を受け入れるなど順調に学術交流を拡充してきています。

モンゴル健康科学大学は、1942年に国立大学として創設されて以来、数回の改称を経て2003年に現在のHealth Sciences University of Mongoliaになりました。医学科、伝統医学科、歯学科、公衆衛生科、薬学科、生命医学科、看護科からなる医療系総合大学で、現在までに12,800名に及ぶ医療人（医師、漢方医、歯科医師、公衆衛生管理者、薬剤師等）を輩出しています。

このたび、去る7月22日から28日までの間、両大学における学生交流の一層の拡充を図り、相互の教育研究水準の向上に資するため、モンゴル健康科学大学においてサマーセミナーが開催されました。学生による医学教育に関するワークショップと、教員による臨床診療に関する第2回共同シンポジウムをメインプログラムに据え、セミナーを通じて両国文化、習慣等の理解促進を図ることを目的としています。本学からは、島田光生教授（臓器病態外科学）を団長に、医学科学生6名（3年生1名、4年生5名）を含む13名からなるモンゴル健康科学大学訪問団が派遣されました。また、大学院ヘルスバイオサイエンス研究部（歯学系）を今春定年退職され、その後、現地で小児歯科のボランティアとしてご活躍されている西野瑞穂名誉教授も本セミナーに参加くださいました。

公式行事のワークショップとシンポジウムでは、モンゴル側から多数の参加者を得て、予定していた時間も大幅に超過するなど非常に有意義なセミナーとなりました。特に本学学生たちにとっては、初めてのプレゼンテーション、さらには英語でということもあって、よい経験を積むことができたと思います。なお、最終日には、今回の訪問を記念して団長の島田教授に客員教授の称号が、モンゴルとの学術交流の礎となった谷憲治助教授（分子制御内科学分野）とコーディネータとしてご尽力された村澤普恵学部長補佐（国際関係担当）に感謝の楯がそれぞれ授与されました。

来年度はモンゴル側の研究者・大学院生からなる訪問団が本学を訪れる予定です。今後益々、両大学の学術交流の発展が期待されます。



モンゴルで学んだこと

医学科4年 永岡 晋一

モンゴルの地に足を踏み入れたとき、モンゴルは予想以上に寒くひどく雨が降っていました。街の中は、薄暗くさびしい雰囲気になりました。

宿泊先の学生寮につくと、モンゴル健康科学大学の学生が温かく歓迎してくれました。さびしそうな街でしたが、そこに住む人々は温かいのだということが彼らから感じ取られました。また彼らの笑顔がとても素敵で印象的でした。

寮の環境はというと、劣悪な環境だと思いました。特に、ト

イレ、洗面台、シャワー室は不衛生で、30年前の日本のようだと言われていました。これでは感染症や食中毒が蔓延してしまうと思いました。これがモンゴルの現状なのだということを実感し、ショックを受けました。街中は下水道の設備はほとんど整って折らず、郊外の住宅街は舗装されていないところに乱雑に建てられていました。

一步、都市を離れるとそこは美しい草原が広がっています。日本では見たことのないような、果てしなく美しく、広い大地



が続いていました。その日はゲルに泊まりました。ゲルというものは考えられて作られていて、夏は涼しく、冬や、寒いときは、防寒ができるようになっていました。とても居心地がよく、また雄大な自然に囲まれて、最高の夜を過ごしました。特に記憶に残っているのは、ゲルでの夜に、人種など関係なく、輪になって大騒ぎしたことです。みんなが一つになった瞬間でした。

モンゴル最後の日は、とてもさびしく、離れたくないと誰もが思うときでした。

この滞在を通して私たちは本当に多くのことを学んだと思います。今のモンゴルの現状から、今後医療人として、何が日本人に貢献できるのかということを考える機会を貰ったと思います。そして、モンゴルに大切な仲間ができました。同じ夢を持つ同士、将来のことを語り合い、大切な時間ができました。モンゴルに行って本当によかったと思います。



モンゴル健康科学大学での研修について

医学科4年 近藤可菜

モンゴルで一週間研修ができる。その話は突然やってきました。どんな生活だろうか。今でもゲルに住み、馬で草原を駆けているのだろうか。どんどん空想がふくらんで、気持ちはすっかりモンゴルの大草原の中でした。

ウランバートルの市街では近代的な高層のマンションの間にひょっこりあることもしばしばで、この国が今まさに変化の段



階にあることを感じました。しかし車で30分も走れば、そこはまさに思い描いていたモンゴルの風景でした。ハイキングで登った山頂では思考も体も吹き飛ばしてしまいそうな自然のパワーを感じました。一面の花畑の中のゲルで過ごした夜や子ヤギの丸焼きも決して忘れることはできないでしょう。

私たちはモンゴル滞在中のほとんどの活動をモンゴル健康科学大学の学生と共に過ごしました。モンゴルでの素晴らしい体験は彼ら学生たちのおかげだったと思います。寮での共同生活や、プレゼンテーション、そしてキャンプと思い出ただけでも心躍る素晴らしい時間を彼らと分け合うことができました。モンゴルの学生は皆とても勤勉で親切で、なにより自分の国のことを真剣に考え、愛している姿がとても印象的でした。

今もモンゴルの学生とはメールをやりとりして交流が続いています。英語ももっと勉強したい、そして医学の勉強ももっとしたいと思いました。そうでなければ私は彼らに置いて行かれてしまうでしょう。いつか彼らと再会できたときに、いろんな話が対等のできるようになっていたいと思います。私たちの交流プログラムはまだまだ続いていくのです。

モンゴル健康科学大学での研修に参加して

医学科3年 岸真文

昨年のモンゴル健康科学大学と徳島大学医学部間の交流協定の締結以来、両大学の交流が進められてきました。その一環として、7月22日から28日までの日程で両大学の医学生同士がモンゴルで交流することを目的とした研修があり、私も参加させていただきました。海外は初めてではなかったのですが英語には全く自信がなく、その点に不安もありましたが、モンゴルに行けるなんてめったにないチャンスだということが私を参加へと促しました。

モンゴルではむこうの学生とプレゼンテーションなどのワークショップをしたほか、モンゴルの文化や大自然に思いっきり触れてきました。彼らが組み立ててくれたゲルに泊まったり、馬に乗ったり、本物のホーミーを聞いたり、中でもハイキングはとても壮大な景色が見られ、モンゴルの自然の美しさに感動しました。モンゴルの学生とはほとんど全ての時間を共にしていたので、すぐに打ち解けることができ、拙い英語で冗談を言

い合ったりもしていました。

今回の研修は、私自身大変貴重な体験ができましたし、学生同士の交流という点でもとても充実したものでした。



全国国立大学医学部長会議に参加して

前医学部長 曾根 三郎



平成14年11月16日から医学部長の任を2年2期の4年間務め、多くの人との出会いと共に新しい取り組みへの経験を多く積むことが出来た。医学部内での取り組みは今までの「医学部だより」の中で紹介させて頂いたので、今回は42国立大学医学部からなる医学長会議の紹介をしたい。全国医学部長会議では学部・大学院教育、研究、社会への関わりなどの事項について大学間並びに文科省医学教育課との情報交換、いろんな問題への提言作成などを行う場として年2回春と秋に開催されている。医学部長在任中は、研究倫理委員会委員長と薬学部問題検討部会の部会長の大役を担当した。前者は臨床研究にかかる倫理と利益相反問題への対応、後者は平成18年度からスタートした薬剤師育成のための6年制に向けた薬学部と医学部・病院との連携をいかに進めるかについての仕組み作り重点を置いたものであった。

臨床研究にかかる利益相反への対応は、米国では1980年にBye Doyl法の制定以後、「大学の知」を社会に還元させるべく産学連携が爆発的に推進され、医学・医療の分野でも画期的な治療薬の臨床開発が飛躍的に進んでいることは周知の事実である。一方で、研究者（医師）と企業との金銭的な関係が被験者（患者）の人権や安全性を犠牲にする事例も発生し、臨床研究が適正にかつ公明性を保って推進できない事態が懸念された。米国NIHは1989年にいち早く、利益相反ポリシーを策定し研究者に遵守を義務づけている。1990年後半に米国医科系大学の殆どは利益相反ポリシーを策定し、社会の変化やニーズに対応し改定をしながら、研究者と企業との連携活動を規制するのではなく、臨床研究を適正に推進しやすい環境を作っている。一方、日本では1996年から科学技術基本計画に従い、産学連携活動が積極的に推進されるも、臨床研究にかかる利益相反の問題は全く議論されない状況にあったが、対応策の必要性が近年指摘されていた。そのような背景の中、2004年度秋より研究倫理委員会が利益相反問題に取り組む事となった。この問題は医療創生に向けた生命科学分野の発展に非常に重要であることより、文科省「臨床研究の倫理と利益相反に関する検討」班（班長：曾根）を形成し、国立大学附属病院長会議との共同作

業として進め、企業や弁護士も加わって議論を重ねて「臨床研究の利益相反ポリシー策定に関するガイドライン」を2006年3月に公表した。現在、各医科系大学において利益相反ポリシー策定作業が進んでいる。

一方、薬学部問題検討部会は、平成18年度からスタートした薬剤師育成6年制に伴い、医学教育、病院実習の増加が予想されている。しかし、薬学部内には医学的バックグラウンドや薬剤師の実務経験を持つ教員が殆どいないことから、将来チームワーク医療の人材育成という観点から医学部と病院がどのような形で薬学部教育に関わっていくかを検討する部会が2004年8月に立ち上げられた。その後、国立大学附属病院長会議、国立大学薬学部長会議のそれぞれから代表が出て、三者懇談会が設けられ、文科省医学教育課の立会いで何度も議論が交わされ、「*国立大学の医学部、附属病院及び薬学部の関係者が共に緊密な連携を図り、それぞれの各専門の英知を結集して、応分の負担を原則に質の高い専門医療人の養成を推進するとともに、高度先端医療の研究・開発など医療の質の向上に資すること」を目的に、国立大学医療人養成等推進協議会（仮称）の設置に向けて合意した。今後、各大学において医・病・薬の連携が応分負担の原則にて大きく展開していくものと思われる。徳島大学では平成16年度に医薬菌の教員組織を一つにした大学院ヘルスバイオサイエンス研究部が既にスタートしており、平成19年度概算要求として「薬学・医学・病院の連携による臨床薬剤師・医療薬学研究者育成システム」事業が採択内定の通知を受けており、全国のモデルとなる薬医病の連携事業が大きな成果をあげるものと期待されている。蔵本団地という地の利を生かして医療人育成の拠点として総合力を発揮できる良い機会として薬学部の薬剤師育成事業には医学部、病院が密に連携して成功させる必要があると思われる。これらの2つ取り組みは医学部長として微力ながらも対外的にお役に立てたのではないかと考えている。

最後に、松本俊夫医学部長にはさらなる発展のためにご尽力をお願いすると共に、医学部の関係各位の方々、特に、3学科長、各種委員長、学部長補佐並びに事務担当者にはこの場をお借りして多大なるご協力並びにご支援を頂いた事に感謝申し上げます。

最後に、松本俊夫医学部長にはさらなる発展のためにご尽力をお願いすると共に、医学部の関係各位の方々、特に、3学科長、各種委員長、学部長補佐並びに事務担当者にはこの場をお借りして多大なるご協力並びにご支援を頂いた事に感謝申し上げます。

最後に、松本俊夫医学部長にはさらなる発展のためにご尽力をお願いすると共に、医学部の関係各位の方々、特に、3学科長、各種委員長、学部長補佐並びに事務担当者にはこの場をお借りして多大なるご協力並びにご支援を頂いた事に感謝申し上げます。

学科長挨拶

研究・教育の人材育成を目指して

医学科長 泉 啓介



卒後2年間の初期臨床研修必修化は本学の将来を担う人材の確保という意味でも臨床医学分野に大きい影響を与え始めている。平成17年度から全国共用試験（4年次の1-3月）が開始されたこともあって学生の臨床指向がさらに強まり、基礎医学分野にとっては臨床医学分野以上に影響は大きい。少ないながらも本学の卒業生が入って来ていた病理学分野も例外ではない。現在の医学科のカリキュラムでは3年次後期から臓器別の臨床医学の講義が始まり、学生はその時点から4年半の臨床医学教育を経験し、晴れて大学院入学、専門医研修を選択ということになる。この時点で若い人でも20代後半に達していて、大部分の学生にとって基礎医学に対する興味は消えてしまっているであろうし、30代になって

研究を始めたのでは超ユニークな発想による研究成果は期待しづらい。それでも一学年から一人でも二人でも卒後に基礎医学、社会医学を専攻する人が出てきて欲しいものである。

初期臨床研修制度は導入されてまだ3年目であり、これが存続する以上は長期的な基礎医学研究・教育の人材育成を目指した本学独自の取り組みが必要である。基礎医学分野自らの教育視点の方向転換、長期の研究室配属（主に基礎配属）を通じて生命科学の面白さや重要性を理解させること、医学部入学時からのMD-PhDコース、医学部挙げての現MD-PhDコース学生の育成と支援、初期臨床研修中に大学院プログラムに参加する制度の導入などが必要かもしれない。休眠中の女性医師の基礎医学分野への転向支援なども考えられる。できることは実現に向けて努力したい。

学科長就任の挨拶



この度、栄養学科長に就任いたしました。前任の中屋学科長の後を引き継ぎ、本学科の卒業としてこれまでの経験を生かし、多くの難題に取り組む覚悟です。栄養学科は、42年の歴史を有し栄養学分野のリーダーとして、その地位を維持してきました。しかし、

全校に100校以上設置されました4年制管理栄養士養成校が検討しています教育改革や栄養教諭制度の導入により、従来の教育カリキュラムの大幅な変更が必要な時期にきています。また「新助手」や「助教」の導入についても管理栄養士養成

栄養学科長 宮本 賢一

施設で認められる「教員」との間で、いろいろな矛盾点が出てきています。昔から、いい大学や伸びる学科は30代の教官により決まると言われています。将来さらに発展する為には、若手教官の意識改革が必要です。「助教」の制度を、いかに若手教官の育成に生かすかが今後の課題と考えます。一方、栄養学科棟はオープンスペースを採用しているため講座や教室の壁はなくなりましたが、逆に教室の独自性や特徴が薄れたように思います。魅力ある栄養学科として将来も発展する為には、世界に発信できる研究成果や新しい教育方法の取り組みが必要です。今後ともご理解とご支援を賜りますようお願い申し上げます。

保健学科の展望



保健学科は配置が繰り延べになっていた教員定員6名が本年4月に配置され、本来の教員配置がやっと完了しました。更に、現在総合科学部が担当している養護教諭養成を、平成20年度以降に入学する学生諸君からは本学科看護学専攻で行うことになりました。これに伴い、看護学専攻の教員定員が3名（平成19年度1名、平成20年度2名）増加することになります。

一方では、具体的な計画は未定ですが平成18年度から始まった人件費削減のため、教員定員の削減を余儀なくされそうです。教育への影響を最小限に留めるよう工夫をこらさねばなりません。

保健学科は医療短大からの改組、大学院保健科学教育部修士課程設置に伴って、学生数・教員数が大幅に増加するとともに、教育内容も格段に高度化しています。これに対応するため建物・

保健学科長 長 篠 博文

設備の整備も進める予定でしたが、国の財政事情の悪化等のため、あまり進んでいません。医療短大の建物からの増設は、プレハブの3教室のみです。旧第5病棟を改修して保健学科で使用する計画がありますが、実現時期は未定です。そこで、今年度は学長裁量経費により、旧第5病棟の一部110㎡をセミナー室4室に使用できるように改装することが認められています。できるだけ早く使用できるように、整備を急ぎたいと思います。

今年度は大学院保健科学教育部修士課程の設置に合わせた、保健科学教育を支援するための特別教育研究経費の配分に加え、学長裁量経費による医用情報・医学統計教育実習設備の充実、看護実践能力育成支援システムの整備が認められました。今後は、準備を進めている平成20年度大学院博士課程設置の実現とともに、教育面でも研究面でも競争的外部資金の獲得に向けて知恵を絞ることが喫緊の課題です。

皆様のご指導・ご鞭撻の程、よろしくお願い申し上げます。

タフツ大学加齢栄養研究所との交流

臨床栄養学分野 武田 英二

平成18年5月から8月まで、タフツ大学大学院 PhD コース3年の今村文昭氏が徳島大学に来て共同研究「食欲、ストレスなどの心理的機能の規定因子、食事をめぐる社会的要因の解明」を実施した。生活習慣やストレスのアンケート調査、身体機能評価、血液検査データをデータベース化し、統計学的解析により、生活習慣病やストレスに関連する生活習慣を明らかにすることが出来た。さらに、今村氏はタフツ大学大学院の教育研究内容、統計学的手法、1年目のグアテマラでの調査、2年目のバングラデシュでの調査、さらには学問に対する真摯な態度についても、多くの若手研究者に教示してくれた。タフツ大学

との交流を発展させることにより、栄養疫学的手法を基盤にした情報発信や21世紀COEプログラムの飛躍が可能であることを確信した。



コンヤン大学との調停式

コーディネータ 福井 義浩

徳島大学医学部と大韓民国建陽（コンヤン）大学校との学術交流協定（部局間）締結式が、4月18日（火）17時から医学部第1会議室で行われた。建陽大学校から金燻洙（キムヒス）総長、金榮伊（キムヨンヒ）前理事長（総長夫人）、鄭榮吉（チョンヨンギル）学事管理処長（教育担当総長補佐）の3名、本学からは曾根三郎医学部長、泉啓介医学科長、長篠博文保健学科長、村澤普恵学部長補佐（国際関係担当）、福井義浩教授（コーディネータ）、明渡志郎事務部長、事務部職員らが出席し行われた。協定書に署名、記念品交換後、曾根医学部長の挨拶、金総長の日本語の挨拶が行われた。その後、鄭学事管理処長がプロジェ

クターを用いて英語で建陽大学校の紹介を行った。この模様は、NHKニュース、徳島新聞、朝日新聞で報道された。



医学部ニュース

FACULTY OF MEDICINE NEWS

● 蔵本祭 (平成 18 年 11 月 3 ~ 5 日) ●

『かけら繋いだ!! 蔵本祭』

蔵本祭実行委員長 (医学科 4 年) 松下 健太

今年の蔵本祭のテーマは PIECE × PIECE でした。このテーマには、一人一人の力は小さいけれど、それらを掛け合わせることで大きな何かを生みだそうという意味が込められていました。

蔵本祭が始まる前は、この大きな意味が込められたテーマに見合うだけの蔵本祭を創ることが出来るのだろうかと不安を感じることもありましたが、しかし日を追うごとに実行委員たちの PIECE が繋がり、その繋がりには蔵本キャンパス内、徳島大学内へと広がっていきました。そして蔵本祭当日には運営者と一般の参加者との PIECE も繋がり、蔵本祭が大きな成功を収めたことを嬉しく思います。

とを嬉しく思います。

今年の蔵本祭は終わってしまいましたが、蔵本祭はこれからも続いていきます。私たちが繋いだ今年の蔵本祭の PIECE が今後の蔵本祭へと繋がっていくことを願ってやみません。

最後になりましたが、先生方・関係者の皆様におかれましては蔵本祭開催にあたり多大なご協力を頂きありがとうございます。



栄養展を終えて

栄養学科 3 年 清田 恵美

栄養展の仕事を終えて達成感と安堵の気持ちでいっぱいです。

今年の栄養展では、「ダイエット」をテーマに低カロリーで満足のゆく食事の提供を目指しました。一言にダイエットと言っても様々な方法があり、献立を立てるにおいては常にカロリーを意識せねばならなかったのが大変でした。今年は看護学科との合同企画ということだったので、看護学科の模擬病院と関連のある展示を行うよう工夫し、また、何度も委員たちで試行錯誤しながら低カロリーの献立を立てました。努力の甲斐あってか、たくさんの方々が模擬病院と栄養展を共に訪れてくださり、楽しんでいただくことができました。健康と食生活について見直す機会を作れたことをとてもうれしく思います。

今回栄養展の委員長をやらせてもらって、一つ行事を行うことがどんなに大変なことかを実感しました。同時に頑張った分だけ大きな達成感を委員全員で分かちあうことができました。

栄養展を行うに当たって、先生方、先輩方には本当にお世話になりました。お忙しいのに嫌な顔一つせず支えて下さり、とても感謝しています。

栄養展の委員の皆さん、ご協力ありがとうございました。皆さんののおかげで心に残る思い出を作ることができました。



保健学科の催し

看護学専攻 2 年 泊野 未来

保健学科では、健康診断を模擬した「模擬病院」の企画展を実施しました。来訪者の希望に応じて、身長、体重、聴力、血圧、アルコールパッチテストなどの測定を行いました。また、今年は基礎代謝量や内臓脂肪レベルの測定を検査に取り入れしました。模擬病院で測定した基礎代謝量の結果を栄養展で提示することにより、ご本人の一日に摂取して良いカロリー計算ができ、とても好評でした。栄養展との連携は、健康と栄養の両方に興味を持っていただけたようでした。展示コーナーでは、肥満を防止する生活習慣を見直すきっかけになればと思い、「メタ

ボリックシンドローム」について取り上げました。ここでは新陳代謝を改善し、毒素排出を促す「デトックス」という健康法を紹介しました。今回の測定結果を健康状態の目安にしてほしいと考えます。模擬病院は、みんなで楽しく運営することができ、良い経験になりました。協力していただいた皆様、ありがとうございました。



第 53 回徳島大学解剖体慰霊祭

学務課 加藤 史織

平成 18 年 10 月 17 日(火)午後 3 時より大塚講堂において、これまでに献体して下さった全ての御霊をお祀りして第 53 回徳島大学解剖体慰霊祭が開催されました。

解剖体慰霊祭は御遺族、白菊会会員、医・歯学部・病院教職員、学生等約 400 名が参列し、献体者の霊に黙祷を捧げた後、医学部長・歯学部長をはじめとする関係者が追悼の辞を述べ、その後参列者全員が祭壇に白菊を献花し、系統解剖・病理解剖のために献体して下さった亡き御霊 5,466 柱の御冥福をお祈りしました。

近年、有り難いことに献体に対する世間の理解が深まり、系

統解剖・病理解剖ともに献体者が増えてきています。

今後も、医学・歯学の発展のため、献体に対するご理解とご協力が絶えないことを願っています。



オープンキャンパス

医学科

8月4日、長井記念ホールにおいて医学科オープンキャンパスが開催された。当日は、泉医学科長の挨拶および入試委員による医学科紹介に引き続き、ミニ講義が行われた。基礎医学からは分子病態学分野・佐々木教授が疾患の病態解明につながる基礎研究について講義され、また、臨床医学からは北川教授が先天性心疾患の心臓外科手術の実際について、手術ビデオを用いて講義された。基礎医学のサイエンスとしての面白さと、臨床医学の醍醐味が参加者に十分伝わったと思われ、高校生達は熱心に聞き入っていた。続いて3班に分かれ、それぞれウイルス病原学分野(足立教授)、分子酵素学研究センター分子細胞学部門(坂口教授)、ゲノム機能研究センター蛋白質情報分野(原教授)の研究室の見学とスキルラボ室の見学を行い、終了とした。当日

の受付者数は高校生251人、保護者9人、その他7人、計267人であったが、受付をしていない人もあり、これを含めると300人近い参加者であった。都道府県別では徳島県内からが198人と多かったが、兵庫県14人、大阪府11人など県外からの参加もあった。近年、医学科オープンキャンパスについての関心は高く、参加者数も年々増加しており、来年からは大塚講堂で開催する必要があるかもしれない。

(有澤孝吉)



栄養学科

2年生を中心とする高校生125名、保護者33名、教諭1名の計165名が参加した。学科長挨拶とミニ講義(飛躍する栄養学科、分子栄養学講義)に対して多くの質問があり、本学科への関心が深いことが感じられた。栄養学科棟の見学では、オープンスペースとなっている研究室や実験室で大学院生の実験や国際学会で発表した英語のポスターの掲示に興味を示していた。

若手研究者による活発な研究と恵まれた教育環境を見学していただいた。

参加する前の予想とは異なって、医学や生物学と関連した

我々が目指す栄養学を理解し、本学科への進学を希望する高校生が多いことが、その後のアンケートから理解できた。

(武田英二)



保健学科

オープンキャンパスは盛夏8月3日の午後、過去最多の高校生233名(述べ73校)および保護者の方々21名を迎え開催されました。説明会の前半は参加者全員に学科の概要、入試方法と3専攻の学習内容、将来の職務などを紹介し、後半は保健学科棟で、希望専攻の実習室・機器等の見学、学習内容の説明および教員との質疑を行いました。アンケートの回答からは、各専門領域について理解を深めることができたようです。また、他の専攻の説明が聞いて良かった、他の専攻を見学したいとの声や、回答者の66%が1、2年生であることなどから、全体説明は高校生が将来の進路を考え、各職種を理解する上で有意義で、一層充実したいと考えます。看護学専攻では、午前中に、短大時代

から続く体験入学(参加者43名)を実施し、看護の学習に対する理解と動機付けを図りました。アンケートからは参加者の満足度は高いと考えています。本学への入学を希望する高校生(アンケート回答者では70%強)が、夢を抱いて優れた医療技術職者の道に進むことを願っています。

(前澤 博)



平成18年度実験動物慰霊祭

動物実験施設 松本 耕三

平成18年9月19日午後3時より青藍会館にて、実験動物慰霊祭が執り行われました。全学からおおよそ300人という多数の方々のご参集をいただきました。佐々木施設長がご都合により出席できず、私が代理でお話しをさせていただきました。科学・医療発展のためとはいえ、多くの動物の犠牲の上に乗っていることを考えると、実験動物の利用、動物実験の方法についてはよくよく熟慮し、必要最小限で、苦痛を極力与えないよう、ぜひお願いしたいものです。徳島大学の実験動物の特徴はマウス・ラットが中心である点で、社会的にいつも問題となるコンパニオンアニマルであるイヌ、ネコの利用が最近ではゼロであることにあります。

KOマウス利用の拡大に伴い、施設のマウス飼育スペースが

少し狭くなって来ました。改修費用が出ると、大幅にそのスペースが拡大できます。現在改修費用を申請中です。皆様の応援無しには実現できませんので宜しくご協力の程お願い致します。

話が少しそれてしまいました。施設利用が増えていくことも確かですが、今年度は昨年度に比べ慰霊祭に参加される方が増えました。

合掌



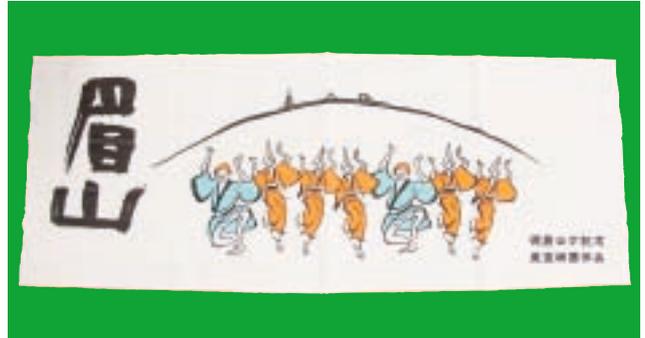
映画「眉山」蔵本キャンパスロケ

「慰霊祭」シーン撮影に協力して

機能解剖学分野 福井 義浩

映画「眉山」の徳島ロケがあると聞いた時から慰霊祭シーンにはぜひ医学生にエキストラとして出演してほしいと思っていた。ある日、東宝映画制作部主任の小森さんと県との観光課の方が訪ねてきて、ロケの候補地を捜していると話した。シナリオを見せていただき、私なりの慰霊祭についての考えをお伝えしたが、原作に合わせてシナリオはほぼ決定済みとのこと。実際の慰霊祭シーンと異なるところもあるが、本質的なところで献体の意義は十分に伝わるであろうと思った。大塚講堂、慰霊塔、病院等を案内し、香川病院長に紹介した。

8月16日の阿波踊りロケから始まった徳島ロケは、9月4日に大塚講堂で慰霊祭シーンを撮ることに決まった。解剖実習が終了したばかりの2年生に声をかけたが、講義で無理とのこと、3-5年生も同じく、チュートリアル、病院実習で無理とのこと、こうなれば、6年生にしか頼めないと思い総代から連絡を取ってもらった。果たして何人が集まるのか心配だったが、30数名が参加可能とのこと、あとは、1年生、栄養学科、歯学部、工学部の学生さんに声をかけ、何とか70名近くの学生に協力していただけることになった。また、白菊会会員、久保教授、事務職員もエキストラとして協力し、シナリオの中の最重要シーンである「徳島市立大学医学部主催 第35回夢草会慰霊祭」の撮影は無事終了した。



「眉山-BIZAN-」

株式会社東宝映画

映画「眉山」プロデューサー 遠藤 学

「眉山-BIZAN-」は、家族同士の、そして恋人との強い絆が、阿波おどりの夜に奇蹟を起こす映画です。いったん故郷の徳島を捨てた娘・咲子が、末期癌で入院した母・龍子との別れと青年医師・寺澤との出会いの中で成長し、家族を心から求めていく様が繊細に丁寧に描かれていきます。その姿は、日々の生活の中でとても身近なことであるがゆえに、忘れてしまいがちなことや本当に大切なものは何かということを出させてくれるものになると思います。

原作のさだまさしさん著「眉山」の大きなテーマが“家族の絆”を謳うものだとすれば、もうひとつの隠れた大きなテーマは“いのち”だと言えるかも知れません。母親が「献体登録者」だと聞かされた咲子が、それをきっかけに母の謎を探し求めていきます。日に日に弱っていく母親に付き添いながら、咲子が心の旅をし、その果てにあったものとは…？その先はぜひ映画をご覧ください、そこから何かを感じ取って頂けたら幸いです。

徳島大学をはじめ、徳島の各所で撮影を行い、多くのご協力を頂きました。なかでも徳島大学で撮影をさせて頂いたシーンは、映画の中でとても重要な意味を持つシーンです。映画は2007年初夏の公開です。見慣れた風景が映画の中にたくさん出てくると思います。ご期待をいただき、公開の際にはぜひ映画館に足を運んでいただき楽しんで欲しいと思います。

「眉山」情熱の口ケ

医学科6年 安部 開人

…美人！日本を代表する女優、松嶋菜々子さんを目のあたりにして改めてそう思った。

さだまさし原作の映画「眉山」の口ケが2006年9月4日、大塚講堂にて行なわれた。献体をテーマにした映画という事もあり、実践医学実習で解剖学教室にお世話になっていた僕達は、口ケの話しを聞き「目指せハリウッド！是非エキストラ出演を！」と半分冗談でお願いしていた。夢が叶い、今回、卒業試験を3日後に控えながらも医学科6年からの33人を中心に約70名が、「医学生」役のエキストラとして一日がかりの撮影に参加した。今回の撮影で僕達が写るのは約2～3秒程、全体としても1、2分あるかないかのシーンだ。

撮影現場に実際に立ち会い、このわずか1、2分のシーンの為に大勢のスタッフが丸1日かけて撮影している事に驚いた。加えて、松嶋さんのお辞儀や表情に対して何回も監督がリクエストを加え、それに対して松嶋さんも「何が悪いの？」と言わんばかりに詰め寄る場面があった。そのような光景を見ると改めて、いい作品を作ろうという出演者、監督方の「情熱」というものを感じたと共に、「映画」は、「芸術」という事を理解することができた。

今は卒業試験期間中だが、「難解」な卒業試験に僕も思わず、先生に詰め寄りたいが、これも先生方の「いい医師を育てよう」という熱い「情熱」と受け止め、いい医師になれるよう努力していきたいと思う。

映画「眉山」に参加して

医学科6年 三上千絵

私は徳島が舞台でさだまさしさん原作の「眉山」の映画撮影があるという話を実践医学の実習中に耳にしました。最初は大した映画じゃないだろうと思っていました。でもある時、監督は私の大好きな「いぬのえいが」の犬童一心さんという事、主演は松嶋菜々子さんという事を聞いて驚き、徳島が「眉山」一色になりそうな予感がしてドキドキしました。

ミーハー根性で慰霊祭のシーンのエキストラを希望し、貴重な体験をする事ができました。撮影は想像した以上に厳しかったですが何度もリハーサルとテストを繰り返して臨んでいて、スタッフの方達の良い作品を作ろうと言う情熱が伝わってきました。慰霊祭のシーンも中途半端に描かれているのではなく、慰霊祭にかける家族の気持ちや学生の姿もしっかりと描かれているように感じました。この映画は、今まであまり扱われていなかった「献体」がテーマの一つと言う事もあり、慰霊祭や献体の知識について、あまりなじみのない一般の方々に知ってもらいたい機会になると思います。

今回、映画「眉山」の口ケを通して私自身、眉山や徳島、献体について改めて考える事ができました。徳島の人にとってもこの映画は、眉山を通して自分の一番身近な徳島を再認識する良い機会になると思います。そして、劇中では徳島名物「阿波踊り」が壮大に再現されていると聞きました。阿波っ子の愛する徳島そして阿波踊りが、この「眉山」を通して全国のたくさんの人に伝わればいいなと思います。

「眉山」に参加して

映画「眉山」の撮影に参加しているのを知ったことがあります。まず第一に感じたのは映画撮影にはこれほどの人手を必要とするのかということです。撮影と一言に言っても監督、助監督、それに十数名撮影スタッフ、また俳優さんのスタイリストやエキストラに指示を出す人。エキストラとして参加していた人は数十名ほどでしたがそれとほぼ同数のスタッフがいたことには驚きました。それぞれの人があのおの仕事を的確にすばやく行っているのには目を見張りました。

医療の現場でもそうですが、どのようなものにもチームがあり、チームワークのよさが最善の結果を生み出すので

医学科1年 谷村 幸亮

はないでしょうか。次に驚いたのは、今回撮影されたのは映画の1、2分にしか満たないシーンであったということです。にもかかわらず実質撮影に要した時間は約8時間。このことから考えると2時間の映画撮影はちょっとやそつとで済みはしないのです。俳優の人も大変そうです。それでも本番になると役に入りきり完璧な演技をする。まさにプロでした。普段何気なく映画を見ているが裏方でのつらさを身をもって体験した今回の撮影。人生の中でめったにない貴重な体験をさせていただき非常にうれしく思いました。今回の体験で得たものを大切にしたいです。

行事予定 (平成18年11月～平成19年3月)

- 11月17日 第101回医師国家試験願書受付(12月6日まで)
試験日:2月17～19日
- 11月28日 第90回助産師国家試験願書受付(12月19日まで)
試験日:2月22日
- 第93回保健師国家試験願書受付(12月19日まで)
試験日:2月23日
- 第96回看護師国家試験願書受付(12月19日まで)
試験日:2月25日
- 12月8日 平成18年度解剖体納骨式・追悼式
- 12月25日 冬季休業(1月7日まで)



19年

- 1月5日 第59回診療放射線技師国家試験願書受付(1月16日まで)
試験日:3月1日
- 第53回臨床検査技師国家試験願書受付(1月16日まで)
試験日:3月2日
- 19日 第21回管理栄養士国家試験願書受付(1月25日まで)
試験日:3月25日
- 19日 大学入試センター試験(21日まで)
- 3月23日 卒業式
- 27日 助産師、保健師及び看護師各国家試験合格発表
- 29日 医師国家試験合格発表
- *診療放射線技師及び臨床検査技師国家試験の合格発表は、4月6日
- 管理栄養士国家試験の合格発表は、5月9日

学遊む

解剖学用語

形態系検査学講座 香川典子



学生時代、解剖学の授業が始まって、悩まされたのは次々と出てくる解剖学用語であった。骨学で、椎骨の棘突起(きょくとつき)が読めず、慌てて実家から漢和辞典を取り寄せた。国文科に入学したのなら、国語辞典のほかに古語辞典や漢和辞典も準備するが、よもや医学部で漢和辞典が必要とは。ようやく骨や筋肉の名前を覚えたと思ったら、さらに部位をあらわす用語が・・・やれ「頭」だの「尾」だのといった用語がある。これが漫才なら「骨や筋肉に頭があるんかい！骨が考えるんかい、ええかげんにセイ！！」とツッコミが入るところだろう。

しかし、解剖学に限らず、私たちの生活に身近な、思わぬ所にも頭や尾があった。その一つが音楽の世界である。「曲の頭出し」といったふうにて、曲の最初の部分のことを「頭」という。モーツァルト作曲ピアノソナタ K 331 の第3楽章(有名なトルコ行進曲)を練習していると、その楽譜に Coda (コーダ) の表示がある。曲の終わりの方、残り1頁のところである。Coda はラテン語の Cauda に語源をもつから、日本語でいえば「尾」にあたる。そうそう、脊髄神経のところに出てきた馬尾は Cauda Equina だけ。

近所にあった学生向けアパート「たらむす荘」が視床

(Thalamus タラムス) のことだとわかったときは、さすが医学部のある徳島ならではのアパート名だと感激した。でも、なぜアパートが視床でなければならないのか？脳の他の部位ではアパートの名前としては向かないのだろうか。その答えがわかったのは、医学部を卒業してからであるが、Thalamus タラムスとはギリシャ語がもとで、寝床の意味である。だから、アパート名にぴったりなのだ。視床は脳の深いところに隠れて表面がなめらかであついクッションを持った寝台を思わせるところからきている。なお、視床というのは昔、視覚との関係が重視されたためである。「たらむす荘」で学生時代を過ごした先輩の K 先生は、寝床としてだけでなく、もちろん勉強部屋としてもよく利用されていた。現在、大学院ヘルスバイオサイエンス研究部で教育に研究にご活躍中である。

「なるほど」、「ヘー」と思うとこれまでめんどくさいと思っていた解剖学用語が馴染みになってきた。お陰で、ちょっと楽しみを感じながら用語を覚えることができたのは有り難かった。そして、あの頃に覚えた用語は、今も忘れていない。

解剖学用語に悪戦苦闘している学生の皆さん、医療職として必ず必要な知識ですが、トリビアの泉のように、知っていれば潤いのある人生が送れます。あーだ、コーダ言っているうちに、覚えられますよ。

禁煙について

平成18年10月1日から医学部敷地内の全面禁煙が実施されました。

禁煙は、身体にとって有益なものであることはいまでもなく、施設の管理面では、タバコのポイ捨てによる火災の危険性の低下、敷地内環境の美化にもつながりますので、皆様のご協力をよろしくお願いいたします。



第233回徳島医学会学術集会

(平成18年7月30日開催)

臨床栄養学分野 武田 英二

徳島大学関係者が93名、医師会から110名、県庁、製薬会社MR、報道、等が49名、一般市民が150名の計402名が参加した。シンポジウムの「最新医療における放射線の役割」では、画像解析技術および治療技術や治療成績の飛躍的進歩についての講演があり、外科的治療を凌駕する成績も示された。教授就任講演「助産師教育—その現状と未来—」では、産婦人科医師が不足しているなかでの助産師の役割と教育の意義について講演された。

受賞者記念講演では、「末梢単核球細胞を用いた末梢動脈閉塞症に対する新たな血管新生治療の試み」と「ミャンマー連邦における超音波白内障手術指導」で、それぞれ先端再生医療技術の開発および徳島発の医療を介した国際貢献活動の成果が示された。公開シンポジウム「糖尿病の征圧に向けて」では、大学研究者、大学病院長、医師会会長、県知事、糖尿病対策班長が、徳島県での糖尿病死亡率を低減させるための具体的な対策について講演された。

一般演題は、基礎的および臨床的研究成果30題が報告され盛会であった。徳島県医師会生涯教育委員会および徳島大学放射線技術科学と臨床栄養学とが担当した。

編集
後記

今回の特集では医学部とモンゴル健康科学大学の2006年夏期交流プログラムを取り上げました。7月下旬に医学部の教官4名・学生6名を含む訪問団がモンゴル健康科学大学を訪問し、シンポジウムでの発表やサマーキャンプでの親睦を通じてモンゴル健康科学大学の教官・学生と実りある交流が行われました。学生にとっては非常に貴重な経験であり、今後のさらなる国際交流の発展が期待されます。

また、写真で見る医学部では映画「眉山」の撮影が紹介されています。徳島大学蔵本キャンパスでも撮影が行われ、教官や学生もエキストラとして参加しました。公開が待ち遠しく、これを機会に阿波踊りだけでなく徳島大学医学部の名が全国に知られることを願います。

11月16日には新医学部長として生体情報内科学分野の松本俊夫教授が就任されました。医学部を取り巻く環境は厳しい状況が続き、卒後臨床研修必修化により研修医の大学離れだけでなく、基礎医学研究への影響も懸念されます。地域医療の再生、基礎研究の発展等、課題に向けての団結と努力が必要とされています。(金山博臣)

発行 徳島大学医学部 編集 医学部広報委員会
広報委員 金山博臣(委員長)、福井義浩、大下修造、太田房雄、齋藤 憲、森口博基、明渡志郎

本誌へのご意見・ご要望は、(第1総務係:木村)E-mail: isysoumu1k@jim.tokushima-u.ac.jp まで
お願いします。なお、写真は執筆者各位の提供により掲載しています。

Tel: 088-633-9118 Fax: 088-633-9028

URL <http://www.hosp.med.tokushima-u.ac.jp/university/servlet/index>